



「声が重なり、輪が生まれた日から」

～創立80周年の体育祭が教えてくれた、支え合う力と6月の学び～

校長 森角 由希子

雨の気配を含んだ風が校庭を渡り、紫陽花が静かに色を深めていく季節となりました。6月は、学級の関係が本物へと育ち、子どもたちの心が揺れやすくも豊かに動く時期です。本校ではこの月を「いじめ撲滅月間」とし、互いを大切にする文化を改めて見つめ直す時間としています。

思い返せば、5月の創立80周年記念体育祭には、子どもたちの成長を象徴する場面がいくつもありました。開会式で生徒会長は、長い歴史を受け継ぐ者としての誇りと、仲間とともに一日をつくり上げようとする思いを、静かに、しかし確かな言葉で伝えていました。その言葉は、朝の光のように会場に広がり、子どもたちの心をそっと整えていきました。

競技が始まると、3年生の体育委員が中心となり、全校を導く姿が見られました。仲間の気持ちを支える声が自然に生まれ、励まし合う空気が会場全体に満ちていました。こうした姿は、学校が育てたい「他者を思う力」が確かに根付いていることを示していました。

閉会式では、忘れがたい光景がありました。生徒会長の呼び掛けに答え、生徒たちが朝礼台の周りに集まり、円を描くように肩を並べて校歌を歌い始めたのです。午後の光がやわらかく差し込み、子どもたちの声はその光に溶けていくようでした。80周年の節目にふさわしい一体感であり、子どもたち自身が学校の文化をつくり出していることを強く感じさせる瞬間でした。

6月は、生徒会や委員会活動が本格的に動き出す月でもあります。体育祭で見せてくれた主体性や思いやりは、これからの学校生活を支える確かな土台となるはずです。いじめ撲滅月間にあたり、子どもたちには「相手の痛みに気付くこと」「言葉を選ぶこと」「一人にしないこと」を、学校全体で丁寧に伝えていきたいと考えています。

紫陽花が雨を受けて色を深めるように、子どもたちの心にも、優しさの層が静かに積み重なっていきます。この6月が、互いを尊重し合う文化をさらに育てる月となることを願っています。

